

四季の漢詩 冬の部

1 初冬作贈劉景文

初冬しよとうの作さく 劉景文りゅうけいぶんに贈るおく 蘇軾そしよく

荷盡か已無つ擎すて雨蓋あめ

荷は尽きて 已に雨に擎ぐるの蓋無がいなく

菊殘きく猶有ざん傲霜枝な

菊は残して 猶お霜しもに傲おごる枝有えだあり

一年好景君須記いちねん

一年の好景 君須きみすべからく記すべし

正是橙黃橘綠時まさ

正これに是れ 橙黃橘綠とうこう きつりよくの時とき

【通釈】

起句 はずの葉は枯れて、もう雨にさしひろげた傘のすがたは無い。

承句 菊の花はおとろえているが、それでも霜にめげぬ枝はある。

転句 一年のうちのこのよいながめを、あなたはずひとも心に留めておくがよい。

結句 ちょうど、ゆずの実は黄色く色づき、みかんは緑のこの時を。

【語釈】

●荷…はず。荷盡は、はずの葉がすっかり枯れてしまったこと。●擎…高くさしあげ

る。●蓋…傘。●菊殘…菊が盛りをすぎて咲きおとろえたこと。●須…ぜひも…

の必要がある、の意。●正是…今ちょうど。「最是」となっているテキストもある。

その場合は何よりも、の意となる。●橙黃橘綠…橙（ゆず、又はだいたい）の実が黄

色く色づき、橘（みかん）は青い、 晩秋から初冬の候をいう。

【押韻】 上平声 四支韻 枝、時、起句・承句を対句とし、起句は踏み落とす。

【解説】

蘇軾（一〇三六—一一〇二）は北宋最高の詩人であり大文豪。

この詩は作者が杭州知事として在任中（一〇九〇年、五十五歳）に、当時杭州で民兵の部隊を統率していた劉景文という人に贈ったもの。詩の前半には、已に枯れ尽きたはずと、霜に耐えている菊を配し、後半に色鮮やかな橙と橘に焦点を当て凛とした初冬の好風景を詠じた佳作です。この詩はまた、劉景文の兄達が早逝し、景文一人が生存していることから、起・承句はそのことを云い、転・結句では景文も晩年に近づいたが、今こそはなばなしい功をたてるべき時だとの意を含み、景文を激励する詩と見る説があります。併せて鑑賞するのも一興です。

2 別董大

董大とうだいに別わかる 高適こうせき

十里じゅうり黄雲こううん白日はくじつ曛くらし

北風ほくふう雁かり雪ふ紛紛ゆきふんぶん

莫愁うれ前路な無知ぜんろ己ちきな

天下てんか誰人だれひと不識きみ君し 君を識しらざらん

【通釈】

起句 十里のかなたまで、黄塵でどんよりとした雲がたれこめ、太陽がうす暗い。
 承句 折から北風が空を渡る雁に激しく吹きつけ、雪が紛々と降りしきっている。
 転句 この激しい風景の中に旅立って行く董君よ、これからの旅先に、自分を理解
 してくれる人が居ないなど心配したもうな。
 結句 この天下に君（が琴の名手であること）をしらぬ者などはいないよ。

【語釈】

●董大：人名、琴の名手であった董庭蘭とされている。董が姓、大は排行で兄弟、従兄弟の最年長の意。●十里：千里となっている本もある。●黄雲：黄色い雲、塵やほこりの為に黄色を帯びた雲。又、めでたい雲、或いは稲や麦などの熟した時の形容に用いることがあるが、この場合はとらない。●白日：太陽。●曛：淡い日の光。又、ほの暗い。●紛紛：乱れるさま。●前路：これから行く道、行くさき、将来、前途。●知己：自分を理解してくれる人。

【押韻】 上平声十二文韻 曛、紛、君。

【解説】

高適（七〇七？―七六五）は盛唐の詩人。李白、杜甫等と親交があった。安祿山の乱に際し、乱の平定に功を挙げ、官吏としても出世し、渤海県侯に封ぜられた。

この詩は、董庭蘭がある事件に関与し、心ならずも放浪の旅に出るのを送る詩である。起句、承句に厳しく心細い風景を歌い、転句、結句で、「心配するな」と力づけ励ます作者の温かい心情が伝わって来る。送別詩の名作の一つです。

付一

送李侍郎赴常州

李侍郎りじろうの常州じょうしゅうに赴おもむくを送おくる 賈か至し

雪晴雲散北風寒

雪晴ゆきはれ 雲散くもさんじて 北風ほくふう寒さむく

楚水吳山道路難

楚水そすい 吳山ござん 道路どうろ難かたし

今日送君須盡醉

今日こんにち 君きみを送おくる 須すべらく 醉よいを 尽つくすべし

明朝相憶路漫漫

明朝みんちよう 相憶あいおもうも 路みちは 漫漫まんまん

付二

歲暮歸南山

歲暮さいぼ南山なんざんに 歸かえる 孟もう浩然こうねん

北闕休上書

北闕ほくけつに 上書じょうしよを 休やめ

南山歸弊廬

南山なんざん 弊廬へいろに 歸かえる

不才明主棄

不才ふさいにして 明主めいしゅに 棄すてられ

多病故人疏

多病たびようにして 故人こじんに 疏とうぎからる

白髮催年老

白髮はくはつは 年としの 老おうるを 催うながし

青陽逼歲除

青陽せいようは 歲としの 除くれに 逼せまる

永懷愁不寐

永懷えいかい 愁うれいて 寐いねず

松月夜窓虛

松月しょうげつ 夜窓やそうに 虚むなし

3 除夜作

除夜の作 じよや さく高適 こう せき

旅館寒燈獨不眠

旅館の寒燈 独眠らず りよかん かんとう ひとりねむ

客心何事轉淒然

客心何事ぞ 転た淒然たる かくしん なにごと うた せいぜん

故郷今夜思千里

故郷今夜千里を思う こきょう こんやせんり おも

霜鬢明朝又一年

霜鬢 明朝 又一年 そうびん みようちよう またいちねん

【通釈】

起句 旅館のさむざむとした灯火のもと、ひとりなかなか眠られない。

承句 旅にある身の思いは、どうしたとか、愈々寂しさがつのるばかりである。

転句 この大晦日の夜、千里をへだてた故郷を思いつつ、

結句 鬢の白くなったこの身は、明日の朝になれば、また一つ旅先で年をかさねるのだ。

【語釈】

●寒燈…さびしい灯火。

●客心…旅人の思い。

●轉…うたた、いよいよ、ますます。

●淒然…寂しいさま、いたましいさま。

●霜鬢…霜のような白いびんの毛。

【押韻】 下平声 一先韻 眠、然、年。

【解説】

高適（七〇七―七六五）は盛唐期の詩人。渤海（山東省）に生れ、若くして辺塞の地を遊歴。五十歳を過ぎてから詩作を始め、たちまち文名があがり、李白、杜甫等とも親交があった。この詩は、壮年期を過ぎた頃の作者が旅先で大晦日を迎えた時の眠れぬ夜の旅愁を詠じたもの。千三百年を隔て、なお、現代人の心に響きます。尚、転句「故郷今夜千里を思わん」と読み、「故郷の妻子達も、今夜は千里の旅先に居る自分のことを思い、うわさしていることであろう」と解釈する説もあります。

付三

除夜宿石頭驛

除夜宿石頭驛じよやせきとうえき しゆく

戴叔倫たい しゆくりん

旅館誰相問

旅館誰か相問りよかん たれ あいと

寒燈獨可親

寒燈獨り親かんとう ひと したしむ可しべ

一年將盡夜

一年將に尽いちねん まさきんとする夜よ

萬里未歸人

萬里未だ歸ばんり いま かえらざる人ひと

寥落悲前事

寥落前事りようらく ぜんじを悲かなしみ

支離笑此身

支離此の身しりり こ みを笑わらう

愁顏與衰鬢

愁顏しゆうがんと衰鬢すいびんと

明日又逢春

明日又春みょうにち またはるに逢あわん

付四

玉關寄長安李主簿

玉關ぎよくかんにて長安ちやうあんの李主簿りしゆぼに寄よす

岑參しん じん

東去長安萬里餘

東ひがしのかた長安ちやうあんを去さること萬里ばんりの余よ

故人那惜一行書

故人こじん那なんぞ惜おしむ一行いちぎやうの書しよ

玉關西望腸堪斷

玉關ぎよくかん西望せいぼうすれば腸はらわた断たつに堪たえたり

況復明朝是歲除

況いわんや復また明朝みょうちやうは是歲除これさいじよなるおや

4 江雪

江雪 柳宗元

千山鳥飛絶

萬徑人蹤滅

孤舟蓑笠翁

獨釣寒江雪

柳宗元

千山鳥飛ぶこと絶え

万径人蹤滅す

孤舟蓑笠の翁
ひとり釣る寒江の雪

【通釈】

起句 見渡す限り周辺の山々には、鳥の飛ぶ影一つ見えず、
承句 小道という小道には人の足跡もない。
転句 一そうの小舟を浮かべて、みのかさを着けた老漁夫が、
結句 ただ一人、凍るような大江の降りしきる雪の中で釣り糸をたれている。

【語釈】

●江雪：川に降る雪、またその雪景色。●千山：多くの山、見渡す限りすべての山々。
●萬徑：多くの小道、すべての小道。●人蹤：人の足跡。
●孤舟：ただ一そうの小舟。それに乗る人の孤独を表現する。●蓑笠翁：みのかさを着けた老人。●寒江：凍るような寒々とした冬の川。

【押韻】 入声 九屑韻 絶、滅、雪。

五言絶句では普通承句と結句に押韻するが、この詩では起句も押韻している。

【解説】

柳宗元（七七三―八一九）は中唐の詩人。河東（今の山西省）に生まれ七九三年二十一歳で進士及第。順調に官途に就き政治改革を志したが政変により失脚。八〇五年永州（湖南省）に左遷、更に八一五年柳州（今の広西壮族自治区）に遷され、その地で没した。枯淡の味わいに富む自然詩に長じ、王維、孟浩然、韋応物と並び王孟韋柳と称せられている。

この詩は作者が左遷されて永州に在った時の作で、みごとに詠じ切った雪中蓑笠の翁の姿に作者自身の置かれた厳しい環境と、孤高の心境を重ねたものと言われています。起句、承句を対句とし「絶」、「滅」という入声の韻を用い、転句、結句の最初に「孤」、「獨」を配して孤独を強調するなど非凡の手法を駆使した唐詩傑作の一つといえます。

付五 塞下曲

塞下曲 常建

北海陰風動地來

北海の陰風地を動かして來る

明君祠上望龍堆

明君祠上竜堆を望む

勐虜盡是長城卒

勐虜尽く是長城の卒

日暮砂場飛作灰

日暮砂場に飛んで灰と作る



5 冬日田園雜興

冬日田園雜興 とうじつでんえんざつきよう 范成大 はん せいだい

檜杣無煙雪夜長

こつとつ けむりな 檜杣 煙無く せつやなが 雪夜長し

地爐煨酒煖如湯

ちろ 地炉に さけ 酒を煨めて あたた 煖きこと湯の如し ごと

莫嗔老婦無盤釘

ろうふ 老婦に いか 嗔る莫かれ ぼんていな 盤釘無きを

笑指灰中芋栗香

わら 笑いて指す かいちゆう 灰中に うりつかんば 芋栗香し

【通釈】

起句 木ぎれは煙も立てず勢いよく燃えて、長い雪の夜はふける。
承句 床下の地中に切ったいろりに、埋めて爛をしてある酒はもう湯のようにあた
たかい。
転句 皿に盛ったおつまみが無いなどと、ばあさんを怒ってはいけないよ、
結句 彼女がにこにこし乍ら指さしている灰の中に、芋や栗が香ばしく焼けている
ではないか。

【語釈】

- 檜杣…木のきれはし、こつぱ、ほた。
- 地爐…地に切ったいろり。
- 煨酒…灰に埋めて酒をあたためる。
- 嗔…いかる。
- 盤釘…盤に食物を盛る。釘は食物を盛ること

【押韻】下平声 七陽韻長、湯、香。

【解説】

范成大（一一二六—一一九三）は南宋の有能な愛国政治家。四十九歳で宰相になり、北方の金に使いし、金の皇帝の前に堂々と困難な交渉に当った。

晩年は郷里蘇州に隠退し、四季の農民の暮らしぶりを詠じた連作「四時田園雜興」六十首を作った。この詩はその中の一首で、冬の夜のつましい農民の楽しみを詠んだもの。農民への愛情のこもった佳作です。

6 冬夜讀書

冬夜讀書 とうやどくしょ 菅 茶山 かん ちゃざん

雪擁山堂樹影深

ゆき 雪は さんどう 山堂を よう 擁して じゅえいふか 樹影深く、

檐鈴不動夜沈沈

えんれい 檐鈴 うご 動かず よるちんちん 夜沈沈。

閑收亂帙思疑義

しず 閑かに らんちつ 乱帙を おさ 収めて ぎぎ 疑義を おも 思う、

一穗青燈萬古心

いっすい 一穗の せいとう 青燈 ばんこ 萬古の こころ 心。

【通釈】

起句 降り積もる雪は山中の庵を覆いつくし、雪に埋もれた樹木の影は深々と見える。

承句 軒端の風鈴はひっそりと音もたてず、夜はしんと更けてゆく。

転句 机上にとり散らした書物を心しずかにかたづけ、疑問のところを考えていると、

結句 稻穂のような灯火の青い炎のもとに、遠い昔の聖賢の真意が伝わってくる。

【語釈】

●擁：いだく。うずめる。ここでは覆いつくす意。

●山堂：山中の家。作者の居る庵。

●檐鈴：軒端につるしてある風鈴。

●沈沈：夜のふけるさま。

●閑：しずかに。

●亂帙：とり散らかした書物。帙は書物を包む覆い。転じて書物。

●疑義：意味のはっきりしないところ。

●青燈：ともしびの青い色。灯火。

●萬古心：遠い昔の聖賢の心。

【押韻】下平声 十二侵韻 深、沈、心。

【解説】

菅茶山(一七四八―一八二七)は江戸時代の儒学者。頼山陽等と共に江戸後期を代表する漢詩人の一人。備後の人。若くして京に上って勉学し、故郷、神辺かんなべに帰り、黄葉夕陽村舎こうようせきようそんしゃという熟を開き青年を指導した。この詩は、学問、読書の楽しみを詠じたもの。青い灯火のもとで古典を繙き、しずかにその真意を考えている儒者の姿を見事に詠じた傑作です。

7 繪 島

絵の島 え しま 菅茶山 かんちやざん

山陽諸島列成隣

山陽の諸島 さんよう しよとう 列して隣を成し れっ りん な

佳境各堪誇北人

佳境 かきよう 各おの北人に誇るに堪えたり おの ほくじん ほこ た

一事唯難及斯地

一事 いちじ 唯斯の地に ただこ ち 及び難きは およ がた

芙蓉隔海露全身

芙蓉 ふよう 海を隔てて うみ へだ 全身を露す ぜんしん あらわ

【通釈】

起句 山陽の瀬戸内海の島々は隣り合って列を成して並び、
承句 その佳境の地は何処をとつても、関東の人々に自慢出来るものだ。
転句 だが、ただ一つこの江の島に敵わないものがある。
結句 それは、富士山が海の向こうに美しい全身を露しているこの眺めだ。

【語釈】

●繪島…江の島の美称。

●佳境…景色のよいところ。

●堪誇…誇ることが出来る。

●芙蓉…蓮の花。また富士山の異名。芙蓉峰とも。富士山の頂が雪を冒っている姿を蓮の花に見立てたもの。

【押韻】 上平声 十一真韻 隣、人、身。

【解説】

菅茶山（一七四八—一八二七）は江戸時代の儒学者。頼山陽等と共に江戸時代後期を代表する漢詩人の一人。備後（広島）の人。若くして京都に上って勉強し、故郷に帰り塾を開いて青年を指導し、後福山藩侯の儒員に列した。儒学者と広く交遊し、特に頼春水（頼山陽の父）と親交した。この人の詩「冬夜読書」は平成二十五年十二月この欄で鑑賞した。

今回の詩「繪島」は作者六十七歳の作。

この年の春作者は鎌倉江の島に遊び相模湾を隔てて全身を白く装った富士山を望んだ時の感動を詠じたもの。起句 承句で先ずは瀬戸内海の風景を自慢出来るものと称え、転句結句で然しこの富士山の眺めだけには敵わないという手法でその感動を一層強調することに成功した美事な作品です。

8 桂林莊雜詠示諸生

桂林莊雜詠諸生に示す けいりんそうぎつていしよせい しめ ひろせたんそう
廣瀬淡窓

休道他郷多苦辛

い や たきよう くしんおお
道うを休めよ 他郷 苦辛多しと

同袍有友自相親

どうほう ともあ みず あいした
同袍 友有り 自から相親しむ

柴扉曉出霜如雪

さいひ あかつき いづ しも ゆき ごと
柴扉 曉 に出れば 霜 雪の如し

君汲川流我拾薪

きみ せんりゆう く われ たきぎ ひろ
君は川流を汲め 我は薪を拾わん

【通釈】

起句 他郷に来てつらいことが多いなどとは言うものでない。

承句 一着の綿入れを共用するような親友がやがてできるのだ。

転句 早朝しおり戸をあけて外に出ると、まっ白におりた霜はまるで雪のようだ。

結句 (寒気はきびしいが負けずにさあ元氣を出そう) 君たちは川の水を汲んで来

たまえ、私は薪を拾ってこよう。(さあ朝食の支度だ)

【語釈】

●休道：言うをやめよ、言うな。休：はやめる、やめよ。●道：は言う。

●他郷：よその土地、故郷以外の土地、異郷。

●苦辛：苦しみ。●同袍：親しい学友。一枚の袍(綿入れ)を貸しあって助け合う

意。●柴扉：しばを編んで作った粗末な門扉、しおり戸。

【押韻】 上平声 十一眞韻 辛、親、薪。

【解説】

広瀬 淡窓(一七八二—一八五六)は江戸時代末期の儒者、詩人。名は建。淡窓は号。豊後(大分県)日田の人。子供の頃から学を好み十六歳のとき筑前(福岡)の亀井南冥、昭陽父子に入門したが、二年後病氣のため故郷日田に帰り療養しながら独学した。二十四歳の時儒学によって身を立てることを決意し塾を開き、二十六歳の時塾舎を新築し桂林莊と名づけた。塾生は全国から集り、塾舎で起居を共にした。

この詩はその塾生たちに示したものである。のち、塾生も増えて手狭となったので、近くの地に咸宜園かんぎえんを作り、そちらに移った。淡窓は安政三年(一八五六)七十五歳で病没した。が、咸宜園はその後も後継者によって受けつがれ明治三十年閉塾までの門下生は四八〇〇名を数え、高野長英、大村益次郎、清浦奎吾、上野彦馬といった知名の人材が輩出した。この詩は、厳しい環境の下で学問に志す若い学生たちをさとし励ます温かい愛情に満ち、淡窓の人柄を示す名作です。教育の本質を今日改めて考えさせられます。

9 富士山

富士山 ふじさん 石川 丈山 いしかわ じょうざん

仙客來遊雲外巔

仙客 せんかく 來たり遊ぶ あそぶ 雲外の巔 うんがい いただき

神龍棲老洞中淵

神龍 しんりゅう 棲み老ゆ す お 洞中の淵 どうちゅう ふち

雪如紈素煙如柄

雪は ゆき 紈素の如く がんそ ごと 煙は柄の如し けむり え ごと

白扇倒懸東海天

白扇 はくせん 倒しまに懸る さか かか 東海の天 とうかい てん

【通釈】

起句 雲の上にそびえる巔には、仙人がやって来て遊んでいる。

承句 また麓の洞穴の深い淵の中には神竜が棲んでいる。

転句 この富士山にまっ白に積っている雪は、まるで清らかなしろ絹のようであり、山頂から吹き上がっている煙は柄のようである。

結句 それはちょうど、白い扇をさかさまにして、東海の空にかけているようだ。

【語釈】

●仙客…仙人。

●神竜…ふしぎな竜。

●紈素…白い練り絹。

【押韻】下平声 一先韻 巔、淵、天。

【解説】

作者石川丈山（二五八三—一六七二）は江戸初期の詩人。名は重之。しげゆき三河の人。家は代々徳川家の旗本。大阪夏の陣に随い、抜けがけの功をあせりとがめられ、武士をやめ学問に専念した。林羅山らと交わり、京都郊外に隱棲、屋敷を詩仙堂と称しそこで文筆生活を送り、九十歳の天寿を全うした。

詩風は高潔、江戸初期を代表する詩人の一人となった。この詩は、それまで曾て詠じられることの無かった富士山を初めて詠じた詩として知られ、またその結句にみる発想のユニークさでも有名である。爾来多くの詩人が富士山詩に挑んでいるが、この山を詠じきるのは至難の業とされています。

10 葉山海岸望嶽

はやまかいがん がく のぞ
 葉山海岸より岳を望む
 すずきとらお
 鈴木虎雄

雪嶽半肩蒼靄間

せつがくはんけんそうあいかん
 雪岳半肩蒼靄の間

海天如拭碧波間

かいてんぬぐごとへきはかん
 海天拭うが如く碧波間なり

秀容千古終無改

しゅうようせんこついにあらたな
 秀容千古終に改まる無し

眞是乾坤第一山

しんこけんだいいちやま
 眞に是れ乾坤第一の山

【通釈】

起句 山頂から半分雪をかぶった富士のお山が、蒼い霞の中に聳え立っている。

承句 海も空も拭ったように清らかで、青々とした大海原も静かである。

転句 この秀でた姿は大古から永遠に変わることはない。

結句 眞にこの山は、天下第一の山なのだ。

【語釈】

●岳…高大な山、ここでは富士山。

●蒼靄…蒼いもや、かすみ。

●間…しずか、やすらか。間は間の俗字とされ、同じ意味に用いることが多いが、

この詩では別字として起句の間は「あいだ」の意に用いている。

●秀容…すぐれた姿。

●千古…遠い昔、永久、永遠。

●乾坤…天と地、天下。

【押韻】 上平声 十五刪韻 間、間、山。

【解説】

鈴木虎雄（一八七八―一九六三）は新潟の人。号は軒。漢文学者、明治三十三年、東京大学漢学科卒業。京都大学教授。著作多数。

この詩は戦後、昭和二十七年十月の作。時に作者七十五歳。日本人の懐く富士山への思いを葉山海岸からの眺めに託して美しく詠い上げた秀作です。敗戦混乱のただ中であって、作者がこの詩によって訴えたかったものは果たして何であったのでしょうか。

11 日出

日は出ず 伊藤春畝

日出扶桑東海隈

日は出ず 扶桑 東海の隈

長風忽拂嶽雲來

長風 忽ち 岳雲を払いて来る

凌霄一萬三千尺

凌霄 一萬三千尺

八朶芙蓉當面開

八朶の 芙蓉 面に當って開く

【通釈】

起句 旭日が日本国の東海の岸から昇り、

承句 力強い風が勢いよく吹いて、お岳を覆っていた雲を吹き払った。

転句 雄々しく空に聳えること一万三千尺、

結句 雪を戴いた富士山が、八枚の芙蓉の花びらが開いたように美しく眼前に現れた。

【語釈】

●扶桑：東海中にある神木。日の出るところといわれる。転じて東方にある国、日本を指している。

●隈：くま。水が岸に曲り入っているところ。きし。

●長風：遠くから吹いて来る雄大な風。転じて雄々しく勢いあるにたとえる。

●嶽雲：高い山（ここでは富士山）にかかった雲。

●凌霄：天をしのぐ。志気の高いたとえ。霄は空、天。

●八朶芙蓉：八枚の芙蓉（はす）の花びら。雪を戴く富士山の姿をいう。

漢詩上でのこのたとえは、江戸初期の新井白石、荻生徂徠に始まり柴野栗山に引き継がれた。

●當面：面に当る。まのあたり。眼前。

【押韻】 上平声 灰韻 隈、來、開、

【解説】

伊藤春畝（一八四一—一九〇九）名は博文^{ひろぶみ}。春畝は雅号。長州藩に生まれ松下村塾に学んだ後、英国に留学し帰国後藩政を倒幕に導いた。維新後、明治六年新政府参議となり大日本帝国憲法の制定に力をつくし、明治一八年初代首相となった。

この詩は旭日に映える富士山の姿を雄々しく格調高く詠じて、日本人の心に迫ると同時に維新達成後の高揚感を感じさせる明治元勳の佳作です。

12 易水送別

易水送別 えきすいそうべつ 駱賓王 らくひんおう

此地別燕丹 此の地 燕丹に別る、
 壯士髮衝冠 そうしはつかんむり 壯士髮冠を衝く。
 昔時人已沒 せきじひとすでぼつ 昔時の人已に没し、
 今日水猶寒 こんにちみづなさむ 今日水猶お寒し

【通釈】

起句 この易水の地は、昔 荆軻が燕国の太子丹に別れを告げ旅発ったところだ。

承句 行く者も送る者も壯士たちは慷慨して怒髪が逆立って、冠をつき上げんばかりであったという。

転句 その時の人々はもういない。

結句 しかし、今日のこの別れの日も、易水の水は当時と変ることなく寒々と流れている。

【語釈】

●易水：川の名、今の河北省易県（保定市の北）を源として東流。戦国時代の燕国の西南の国境を流れていた。●燕丹：燕国の太子丹。丹は曾て人質として秦に居た時、秦王政（後の始皇帝）に冷遇された為、恨みを抱き燕に逃げ帰った。その後秦は次第に隣国を侵略し、燕の国境にまで迫った。そこで丹は、当時食客として燕にあった荆軻を秦王暗殺の刺客として送ることとし、易水のほとりで送別した。●髮衝冠：激しく怒るさま。怒りで髪が逆立ち冠をつき上げる意。この時の別れの状況を史記は次のように記している（刺客列伝）「高漸離（人名）筑を撃ち、荆軻和して歌う。変徴の声を為す。又前みて歌を為りて曰く、風蕭蕭として易水寒く、壯士一たび去って復た還らずと。復た羽声を為し、忼慨す。士皆目を瞋らし髮尽く上りて冠を指す」。●水猶寒：前期荆軻の詩の「易水寒」を受ける水が冷たい意。

【押韻】平声 十四寒韻 丹、冠、寒

【解説】駱賓王（六四〇？―六八四？）は義烏（浙江省）の人。七歳にして詩文を作ったという。特に五言詩にすぐれ、王勃、楊炯、盧照鄰と共に初唐の四傑と称される。官は長安主簿に登ったが、則天武后の時に左遷され自ら官を辞した。光宅元年（六八四）徐敬業が則天武后討伐の兵を挙げるとその幕僚となり武后を指弾する檄文を書いた。これを読んだ武后はかえってその才を惜しんだという。後、徐敬業が敗れると行方をくらました。

この詩は駱賓王が易水のほとりで人を送った時の作であるが、送られる人は徐敬業であったと見るのが自然であろう。自らの武后への怒りを「今日水猶寒」の句に託して、九百年前の太子丹と荆軻の秦王への怒りに比していることは明らかで、この典故を短い詩に見事にとり入れた傑作です。



13 楓橋夜泊

楓橋夜泊 ふうきょうやはく 張繼 ちようけい

月落烏啼霜滿天 つきお からすな しもてん 霜天に満つ

江風漁火對愁眠 こうふう ぎよか しゅうみん たい 愁眠に對す

姑蘇城外寒山寺 こそ じようがい かんざんじ

夜半鐘聲到客船 やはん しょうせい かくせん いた 客船に到る

【通釈】

起句 船中でうつらうつらしていると、鳥の鳴き声が聞こえてくる。(もう夜明けかと驚い

て外を伺うと) 月は西に沈み厳しい霜の気配が天に満ちている。

承句 江岸の紅葉した楓樹が漁船の漁火に映じ、旅の愁いで眠れぬ目にちらちらとうつる。

転句 おりしも、蘇州の町はずれの寒山寺から

結句 夜半を知らせる鐘の音が聞こえて来た。(まだ夜半なのだ)

【語釈】

●楓橋：江蘇省、蘇州の西郊にある楓江にかかった橋。●夜泊：船の中に夜泊ること。

●霜滿天：霜の気配が天に満ちる。昔、中国では、霜は天から降ると考えられていた。

●江楓：川岸の楓樹。楓はマンサク科・フウ属の樹木で秋紅葉する。日本のかえでとは別

種。●漁火：漁船のいさり火。●愁眠：寂しい眠り。旅の寂しさや悲しみのために熟睡でき

ず、うつらうつらしていること。●姑蘇城：蘇州の町。呉の古都。●寒山寺：蘇州郊外にあ

る仏寺。昔、寒山かんざん・拾得じつとくが住んでいたと伝えられている。

【押韻】 下平声 先韻 天、眠、船。

【解説】

張繼は中唐の人。天宝十二年(七五三)の進士。この詩は作者が春秋戦国時代の呉の古都である姑蘇城(蘇州)地方に船旅の途中、楓橋のほとりに船泊りした時の作。寒さの厳しい船中で熟睡も出来ず夜通しうつらうつらしている情景を目の前に見るように詠じた佳作です。寒山寺には清の人俞樾ゆえつの筆になるこの詩の石碑があり、その拓本が日本にも多く伝承している。又戦前は旧制中学の漢文の教科書に採録されたことから、日本人に最も多く知られた漢詩の一つであった。

14 寒 夜

寒夜 かんや杜 秉 と へい

寒夜客來茶當酒

かんや かくきた ちゃ さけ あ
寒夜客來つて茶酒に當つ

竹爐湯沸火初紅

ちくろ ゆわ ひはじ あか
竹爐湯沸いて火初めて紅し

尋常一樣窗前月

じんじょう いちよう そうぜん つき
尋常一樣窓前の月

纔有梅花便不同

わず ばいか あ すなわ おな
纔かに梅花有つて便ち同じからず

【通釈】

起句 寒い晩に來客があり、酒を出したいところだが、代わりに茶でもてなすこととした。
 承句 竹を編んだ茶炉にかけた茶釜の湯も沸き、火も赤く盛んにおこつてきたばかり
 転句 おりから窓辺にさして來た月は、格別ふだんと變つた月ではないけれど、
 結句 そこに一枝の梅の花があるお蔭で、今夜の清談が特別に心地よいものとなっているのだ。

【語釈】

- 寒夜…寒い夜。冬の夜。
- 茶當酒…酒の代りに茶を出す。
- 竹爐…竹を編んで作つた茶炉。
- 尋常…一樣普通で格別他と變りがない。
- 纔…やっと。かろうじて。
- 便…すなわち。すぐに。

【押韻】 上平声 一東韻 紅、同。起句は踏み落とし。

【解説】

作者は宋の人、字は小山しょうざん。この詩は、寒夜に訪れた客に熱い茶を入れ、暖炉を擁してもてなした様子を技巧を弄せず淡々と詠じたもの。おりから窓にかかる月と、月光に映える一枝の梅花を前にしての二人の清談の様子が、梅の香りと共にせまってくるような作品で、同時に作者の清らかな風流心がしのばれる、心暖まる佳作です。

15 夜 雪

夜雪 やせつ白居易 はく きよい

已訝衾枕冷

すでに いぶか きんちん ひ 已に訝る衾枕の冷やかかなるを

復見窗戸明

また み そうご あま 復見る窓戸の明らかなるを

夜深知雪重

よるふか ゆき おも し 夜深くして雪の重きを知り

時間折竹聲

とき き せつちく こえ 時に聞く折竹の声

【通釈】

起句 寢床についても仲々寝つかれず、夜着と枕もとがいやに冷めたいなあといぶかって
いと、

承句 ふと見る窓辺が、明りのように白くなって来た。

転句 夜がふけるにつれて、雪がだいぶん積ったのであろう、

結句 時折り、雪の重みで折れる竹の音が静寂を切り裂くように聞こえてくる。

【語釈】

●夜雪：夜間に降る雪。夜の雪。

●訝：いぶかる。あやしむ。おどろく。

●衾枕：寝衣とまくら。夜具。

●窗戸：窓と戸。

●折竹：雪が積って折れた竹。又雪の重みで竹が折れること。

【押韻】下平声 庚韻 明、聲、 起・承句を対句とし起句は踏み落とし。

【解説】

白居易（七七二―八四六）、字は楽天。中唐を代表する詩人。この人の詩はすでに平成二十八年六月に「對酒」を、また同年十月に「村夜」をしました。此の詩は、作者四十五歳の元和十一年（八一六）、左遷されて江州（江西省九江）に在住していた時の作。寒夜、つめたい夜具の中に寝もやらず不遇の身を横たえる作者の姿が、窓外の雪かげと、時々折竹の音の聞こえる静寂の裏に目の前に浮び上るように描かれた佳作です。詩は起句、承句を対句とし、「已訝」「復見」で体感と視覚によって寒さを強調し、結句では聴覚にうったえて静寂を強調するという美事な構成となっています。

16 問劉十九

劉十九りゅうじゅうきゅうに問うと 白居易はくきよい

綠螳りよくぎ新酷しんぱいの酒さけ

紅泥こうでい小火しょうかの爐ろ

晚來ばんらい天雪てんゆきふらんと欲ほつす

能飲よ一杯いっぱいを飲のむや無いなや

【通釈】

起句 醸かもしたばかりのにごり酒と、

承句 (それを温める為の)赤土で作った小さな炉も出来上った。

転句 今夜の空は雪の気配、

結句 どう？(一緒に)一杯やりませんか。

【語釈】

●問：たずねる。聞く。●劉十九：劉は姓。白居易の友人。名は不詳。十九は排行(一族中の兄弟・いとこを年齢順にならべた順番)●綠螳：綠蟻とも書く。美酒の異称。螳(蟻)は酒の表面に浮ぶ滓をいう。●新酷：酒かましたばかりのにごり酒。新は・・・したばかりの意。酷はにごり酒、どぶろく。●紅泥：赤色の粘土。これで炉を作る。綠螳の対語として用いた。

●晚來：夜になって、今夜は(來は助辞)●「能・・・無」：・・・しませんか、どうですか？。勧誘の意。

【押韻】 上平声 七虞韻 爐、無。 起・承句は対句とし起句は踏み落とし。

【解説】

白居易は中唐を代表する詩人。この人の詩は既に度々鑑賞しました
(平成二十八年六月「對酒」 全十月 村夜・二十九年二月「夜雪」三十年八月「苦熱題」 恒寂師禪室)。

白居易は元和五年(八一五)四十四歳の時、江州司馬に左遷され、足掛け五年間江州(江西省九江)に滞在した。この詩はその頃の作で、近くに住む親しい友人劉某を雪の夜、酒に誘った心温まる作品で、一筆の封を持たせて使いの者を走らせる風景を想像すると面白い。詩は小品ながら美事な構成で、起承句は美しい対句とし、起句の酒、承句の暖かい火炉に対し、転句で屋外の雪の気配を述べ、結句ではやくくだけた口語調で一杯どうですかと誘う口調は正に白居易ならではの手法といえます。白居易の深い友情の詩の絶品です。

17 泊秦淮

秦淮しんわいに泊はくす 杜と牧ぼく

煙籠寒水月籠沙

けむり かんすい こ つき すな こ
煙は寒水を籠め 月は沙を籠む

夜泊秦淮近酒家

よるしんわい はく しゅか ちか
夜秦淮に泊して 酒家に近し

商女不知亡國恨

しょうじょ し ぼうこく うらみ
商女は 知らず 亡国の恨

隔江猶唱後庭花

こう へだ な とな こうていか
江を隔てて 猶お唱う 後庭花

【通釈】

起句 夕靄が秦淮河の寒々とした水面にたちこめ、月の光は河岸の砂一面を照らしている。
承句 この夜、秦淮河に舟泊りしているのだが、近くの河岸には料亭が立ち並んでいる。
転句 料亭の妓女たちは、昔この地に都した陳の国の亡国の悲しみなどは知らないで、
結句 その亡国の原因となった「玉樹後庭花」の曲を今なお歌ってさんざめいているのが聞こえてくる。

【語釈】

●秦淮：南京城の南を流れて長江に注ぐ運河の名。秦淮河。秦の時代に掘られたのでこの名がある。河岸には繁華街が連り、妓楼があった。●泊：舟どまりする。
●煙：もや。●籠：たちこめる。包む。●寒水：寒々とした河の流れ。●沙：すな。みぎわの砂。●月籠沙：月の光がみぎわの砂一面を照らしている。●酒家：料亭。
●商女：料亭の妓女。●亡國恨：陳の国の亡国の悲しみ。又自ら国を亡ぼした陳の最後の皇帝の悲しみ。●後庭花：「玉樹後庭花」という歌曲の名。陳の最後の皇帝、陳叔宝は愛妾の美貌をたたえてこの歌を作り、日夜酒食にふけり、政治をかえりみなかったため、ついに隋に滅ぼされた。

【押韻】 下平声 六麻韻 沙、家、花

【解説】

杜牧（八〇三―八五二）は晩唐第一の詩人。詩風は軽妙洒脱。多くの美しい七言詩をのこしている。この詩は、作者が南朝の古都金陵（南京）の繁華街に沿って流れる秦淮河に舟泊りしての作。岸辺の酒楼から聞こえて来る、妓女達の歌声を聞きながら、その地にくりひろげられた二百数十年前の亡国の歴史に独り思いをはせる詩人の姿が目に見えるような、美しく、哀愁のこもった佳作です。

18 寄友

友に寄す 李群玉

野水晴山雪後時

野水晴山雪後の時

獨行村路更相思

獨り村路を行きて 更に相思う

無因一向溪橋醉

一たび溪橋に向いて酔うに因無く

處處寒梅映酒旗

処処の寒梅酒旗に映ず

【通釈】

起句 野原の中を流れる川、晴れわたった山々、雪が降りやんだ後の冬景色の中、
承句 村里の道を、君と別れてただひとりあゆめば、思われるのは君のことばかり。
転句 谷川にかかる橋のたとまでやって来て、居酒屋を見つけたが、立ち寄って酔
う気にもなれないで、

結句 あちらこちらに寒梅が開き、居酒屋の旗に照り映えているのを見ているのだ。

【語釈】

●野水：野原を流れる川。●村路：村里のみち。●相思：相手のことを思う。「互に思
う」ではない。●無因：故なし、原因、理由がない。●塵纓：ちりのついた冠の紐。
転じて俗世の官職。●向：おいて、むきあって、ちかづいて。●溪橋：谷川にかかる
橋。●處處：いたるところ。あちらでもこちらでも。●寒梅：寒中の梅。冬の梅。
●酒旗：酒居の看板に立てる旗。

【押韻】 上平声 四支韻 時、思、旗。

【解説】

李群玉（八一三―八六〇？）は晩唐の詩人。

この詩は、作者が、冬の日友人と別れた後の心情をその友人に書き送ったものと思
われる。承句の「獨行」「更相思」に続き転句で、「無因・・・酔」と畳みかけ、別後の
孤独感をしんみりと詠い上げた手法は美事で、友情の深さをしのばせる佳作といえま
す。

19 示 兒

兒じに示しめす
陸游りくゆう

死去元知萬事空
死しし去さらば元もと知る万ばん事じ空むなしきを、

但悲不見九州同
但ただ悲かなしむ九州きゅうしゅうの同おなじうするを見みざるを。

王師北定中原日
王師おうし北きたのかた中原ちゅうげんを定さだむる日ひ、

家祭無忘告乃翁
家祭かさい忘わする無なく乃翁だいおうに告つげよ。

【通釈】

起句 死んでしまえば一切くわう空くうに帰し、万事おしまいだということはもとより知っている。

承句 ただ残念なことは、わが国全土の統一した姿を見ないで死んでゆくことである。

転句 わが天子の軍隊が、北方の中原地帯を平定べんげい（都汴京奪還）した時には、

結句 わが家の先祖のお祭りをして、わしにそのことを報告することを忘れるでないぞ。

【語釈】

●九州：天下。中国全土をいう。古代中国全土を九つの州に分けたことによる。●王師：天子の軍隊。ここでは南宋の軍隊。●中原：中国の中央部。今の河南省を中心とする地方一帯。宋の都は中原の汴京にあったが当時金に占領されていた。●家祭：先祖の祭り。●乃翁：父親が子供に対して自分を呼ぶ語。乃（なんじ）の翁（ちち）の意。

【押韻】 上平声 東韻空 同、翁。

【解説】

南宋最大の詩人陸游が死に臨んで息子達に遺した辞世の詩。この時陸游八十五歳。

陸游（一一二五―一二〇九）は越州山陰（浙江省、紹興）の名門の出身。号は放翁。幼くして文名あり。生涯を通じて、金に対する徹底抗戦をとなえた。三十歳の時科挙試験に応じ好成绩を挙げたが、和平派の宰相秦檜しんかいの妨害で落第。秦檜の死後ようやく進士の資格を得て官に就いた。その後和平派との抗争で、昇進、免職をくりかえした後、最後は故郷に引退した。

20 苦寒 三首其二

寒に苦しむ 三首其の二 楊 萬里

添盡紅爐著盡衣

紅炉を 添尽し 衣を著尽す

一杯方覺暖如癡

一杯方に覺ゆ 暖かきこと癡の如きを

人言霜後寒無奈

人は言う 霜後の 寒奈ともする無し

春在甕中渠不知

春は甕中に在るを 渠知らず

【通釈】

起句 赤々と炭の燃えさかる火鉢に、ありったけの炭をくべ、衣服を着込み、
承句 一杯の酒を含めば、体中がぼうつとなる程 暖かい。

転句 世間の人は、霜の降りた後の寒さはどうしようもないと言うが、
結句 春がもう酒甕の中にあるのを彼等は知らないのだ。

【語釈】

●苦寒…寒さに苦しむ。●添盡…ありったけのものを添える。●紅爐…あかあかと燃える火鉢。●着盡…いっぱいに着込む。●一杯…一杯の酒。●痴…狂う。正気でない情況。

●無奈…いかんともする無し。●甕…酒を入れるかめ。●渠…かれ。彼。

【押韻】 上平声 五微韻 衣。支韻、痴、知、通韻。

【解説】

楊萬里（一一二七—一二〇六）は南宋の詩人。

紹興二十四年（一一五四）の進士。官途につき、地方、中央の官職を歴任した。その性格は剛直であったとされるが、多くの庶民的な詩を遺し、陸游・范成大と並び南宋三大詩人に挙げられている。この詩は、三連作の第二首。苦寒と題しながら、寒に苦しむ表現を用いず、むしろ春を待つ冬の生活を楽しんでいるかのような作品となっている。その発想の面白さに読む人の心もなごまされる佳作です。

付六 左遷至藍關示姪孫湘 左遷されて藍関に至り姪孫湘に示す 韓 愈

一封朝奏九重天

一封 朝に奏す 九重の天

夕貶潮州路八千

夕べに 潮州に 貶せらる 路八千

欲爲聖明除弊事

聖明の為に 弊事を 除かんと欲す

肯將衰朽惜殘年

肯て 衰朽を 將て 殘年を 惜しまんや

雲橫秦嶺家何在

雲は秦嶺に 横わりて 家 何くにか在る

雪擁藍關馬不前

雪は藍関を 擁して 馬 前まず

知汝遠來應有意

知る 汝の 遠く來たる 応に 意有るべし

好收吾骨瘴江邊

好し 吾が 骨を 収めよ 瘴江の 辺に

21 僧院

僧院そういん釋靈一しゃく れいいつ

虎溪間月引相過

虎溪こけいの間月かんげつ引ひいて相過あひすぎ

帶雪松枝掛薜蘿

雪ゆきを帶おぶる 松枝しょうし 薜蘿へいらかを掛かく

無限青山行欲盡

無限むげんの 青山せいざん 行ゆくゆく尽つきんとし

白雲深處老僧多

白雲はくうん深ふかき 処ところ 老僧ろうそう多おし

【通釈】

起句 かの東林寺の境内を流れる虎溪のような溪流を、静かに照る月影にみちびかれて渡れば、承句 雪をかぶった松の枝々にはつたかずらが垂れ下っている。

転句 遠く限りなく続くとみえた山々も行くにつれて尽き、ようやく寺にたりついた。

結句 白雲が深く立ちこめるこの寺には年老いた多くの高僧が修行しておられるのだ。

【語釈】

●僧院：寺。寺院。●虎溪：江西省廬山にある東林寺の前を流れる溪流。昔、晋の名僧慧遠えおんが、この寺に住み自ら禁足の誓いを立てて、来客があっても虎溪を過ぎて見送ったことはなかったが、ある日親友の陶淵明と陸修静が寺を訪れ辞去する時に慧遠は話に夢中になり思わず共に虎溪を渡ってしまい、気が付いた三人は顔を見あわせて大笑いしたという「虎溪三笑」の故事がある。●間月：静かに照る月。●引：引く。みちびく。●帶雪：雪をおびる。雪をかぶる。●薜蘿：マサキノカズラとツタカズラ。●行：ゆくゆく。歩きながら。進むにつれて。●老僧：年老いた僧。

【押韻】下平声 歌韻。過、蘿、多。

【解説】

釋靈一（七二七―七六二）は盛唐末期の僧。剡中（浙江省）一説に廣陵（江蘇省）の人。俗姓は呉。浙江会稽山中の雲門寺、余杭の宜豊寺、揚州の慶雲寺等に住んだ。高德の僧として弟子が多く、禪誦の間に多くの詩歌を賦し、劉長卿・張繼・皇甫曾・郎士元・嚴維・僧靈徹等と塵外の交わりを楽しんだ。また山水を愛し浙東浙西の名山や名刹は悉く訪れたという。

この詩は作者がさる名利を訪れた時の作で、寺の前を流れる溪流を虎溪になぞらえ、雲深い山中に在る僧院の模様と其処に住む高僧たちを訪れようとする自らの清らかな心情を言外に美しく詠じた佳作です。

なお、この詩を作者が廬山の僧院を訪れた時の作とし、実際に虎溪を渡ったという説もあります。